

# 日米の高等学校における生徒指導の比較

## —広島井口高校とニューバーン・ハイスクール—

広島県立広島井口高等学校 教諭 西木 豊

### (1) はじめに

今回、グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトの一員として渡米する機会をいただいた。これまでに2度、語学研修という形でアメリカに行かせていただいたが、今回のように日米両国の教育実践における共通性と異質性に基づく研究を目的にするのは初めてである。この機会を大いに生かして自らの教育実践に活かしていきたいと思う。

### (2) 研究の概要

日米（広島井口高校とニューバーン・ハイスクール）における教師の生徒に対する生徒指導のあり方と生徒の学校生活に対する捉えを比較することにより、それぞれの学校が持つ長所と課題について考察する。

### (3) 研究内容

#### ① 校則及び指導方針の比較

日本の高校（本校）の校則を大別すると、登下校時刻、服装規定、校内の生活、交通安全、校外での生活となっている。以下、この順番に比較を試みる。

本校の登校時間は8時35分となっており、小学校、中学校を経て高校にやってくる生徒にとっては、普通に受け入れられる時間といえよう。遅刻をした生徒に対しては、理由の如何を問わず、遅刻届を書かせ生徒指導部が毎日集計する。考慮すべき理由で保護者から連絡があった生徒については、担任が集計表からその生徒の名前を削除する。4月から7月、9月から12月、1月から3月といったように3期に分けて集計をする。各期において遅刻を3回すると反省文指導、6回遅刻をすると、生徒指導部からの指導（朝8時に登校させ、担任と一緒に該当生徒を指導する。場合によっては、一定期間、毎朝8時に来て奉仕活動をさせることもある）、9回目は保護者を召還し管理職訓戒を行う。時間を守ることは約束を守ることと同じくらい大切なこと、高校時代という将来を決めるのに重要な時期に、自分の能力を最大限伸ばすためにも基本的な生活習慣を身につけることを生徒に訴えている。

ニューバーン・ハイスクール（以下、NBと記す）の場合、始業時間は7時45分になっていて、生徒の大半はスクールバスを利用したり、自家用車を自分で運転したり、家の人に送ってもらったりして通ってくる。授業時間は90分が4コマあり、その間の休憩時間はたったの5分である。本校の場合は、始業時の遅刻に重点が置かれているが、NBの場合、授業の遅刻についても毎時間厳しくチェックされ、生徒指導の対象になる。遅刻の定義を、「ベルが鳴り終わってから教室に入ろうとすること」と定め、9週間を単位として1回目の遅刻は放課後の「居残り勉強」とし、遅刻を出席扱いとする。2回目の遅刻に対しては、それに加えて適切な生徒指導上の指導が加えられる。3回目になると、2回目の指導内容に加えて、教師は親に連絡をする。4回以上になると、欠席扱いとなり、教師はチル・アウト（反省室のようなもので、教師によって教室から退出を命じられた生徒を公認のスタッフが指導する場所）の管理者へ懲戒の紹介状を提出し、管理者が適切な処置を決めることになっている。

服装規定については、日本のほとんどの学校において独自の制服が定められており、それを着用して登校することが義務づけられている。また、頭髪についてもパーマや脱色、染色を認めている学校はほとんどない。指輪やピアス等、アクセサリー類についても禁止している。本校の場合、始業日や学校行事の前には頭髪・服装検査をしており、違反していた生徒に対しては期日を定めて改善してくるよう指導している。学校はフォーマルな場であり、制服を正しく着ている必要があること、外見によってその人の全てが分かるわけではないが、その人の一部分はわかるわけであって、その一部分で判断されて自分が不利な立場に立たされないようにすることが大切であること、また、それぞれの生徒は学校集団の一員であり、みんなが守っている集団の規則というものを、自分も守らなければならないといったような指導を行っている。

一般には、アメリカの高校の服装は自由だと思われがちであるが、NBでは、すべての生徒の健康と安全

と教育の機会を保障するために、そして生徒がNBで学ぶことにプライドを持てるように次のような服装規定 (Dress Code) を設けている。

常に靴をはくこと (スリッパ、サンダルは不可)、露出部分が多い服は禁止 (スカート丈は太ももの真ん中よりも長いこと、タンクトップ等は禁止など)、麻薬、アルコール、タバコの使用を促進するようなスローガンやイラスト、わいせつな言葉が書いてあるような服は禁止、帽子やサングラスは校舎内では着用禁止、とがりくぎや飾りびょうのついたブレスレットは禁止、アクセサリとして鎖は禁止、ギャングのシンボルとなっているような服装は禁止、下着が見えるようなズボンやショーツは禁止といったような内容である。不適切な服装に対してはその場で改善を求められるが、それができない場合には保護者に連絡して帰宅させることになっている。

校内の生活については、本校の場合、貴重品の管理、持参物、学校施設や備品について定めている。貴重品は各個人が責任を持って管理すること、自分の持ち物にはきちんと名前を書いておくことなどといった項目がある。持参物については学業に関係のないものは持ってこないことになっており、持ってきてはいけないものとして、携帯電話、PHS、ゲーム類、漫画、菓子類となっている。時代を反映してか、携帯電話、PHSを持ってくる生徒が後をたたない。それらを持ってきていることが発覚した場合、電話を一時預かり、保護者に来校していただき、保護者に返却している。授業中に呼び出し音が鳴る、メールを打つ、授業に集中できない、親が知らない交友関係ができてくる、いたずらメールやストーカー、カンニングにも利用できる、通話料金を払うためにアルバイトをする、といったことに繋がるため禁止しているという本校の方針を保護者に理解していただくと共に、生徒に指導している。

NBの方が、電子機器の持ち込みについては厳しく、携帯電話はもちろんのこと、ウォークマンも校舎内で持っているとならば没収の対象になる。貴重品の管理、持参物については本校の規定とほぼ同じであるが、NBは不必要なものを持ってきて紛失や盗難にあっても責任は一切負わないと明言している。

交通安全について、本校の場合 (広島県公立高校のほとんどの場合) 特記することとしては運転免許の取得を原則認めていないということである。これは、「高

校生の運転免許取得及び二輪車に関する申し合わせ事項」いわゆる三ない運動 (免許を取らない、バイクを買わない、バイクに乗らない) によるものである。これは過去において高校生のバイク事故が相次ぎ、若い命が多数失われたことによる対策として、学校、PTA、警察が申し合わせたもので、現在も学校で校則として堅持している。

校外の生活についても制約を設けているのが日本の校則の特徴といえるかもしれない。学校を離れたら、責任は保護者にあり、問題行動があった場合には警察が対処するのが本来の姿であり、従って学校が指導を加えるようなことではないといった意見もある。アルバイトを禁止するとか、カラオケボックスに行くときは保護者同伴でといったような校則が本校にもある。アルバイトに関しては家計に問題がなければ、勉学に集中して欲しいといった願いや、密室に近いカラオケボックスに、高校生が集まるということは、社会一般の日からすると飲酒・喫煙の疑いをかけられる恐れがあるといったこともあり、それらについて生徒に理解を求めているところである。

ほとんどのアメリカの高校では、校外の生活については感知していない。アルバイトを禁止するどころか、カウンセラーのところに行けばアルバイトを斡旋してもらえる。自動車の免許にしても、州法で認められていることを学校で禁止することはできない。アメリカの高校には、だいたい生徒用の駐車場があり、NBにもかなり大きな駐車場があった。NBには、ドライバーズ・エジュケーションのコースもあって、交通安全について学ばせ、運転免許の取得を容易にしている。

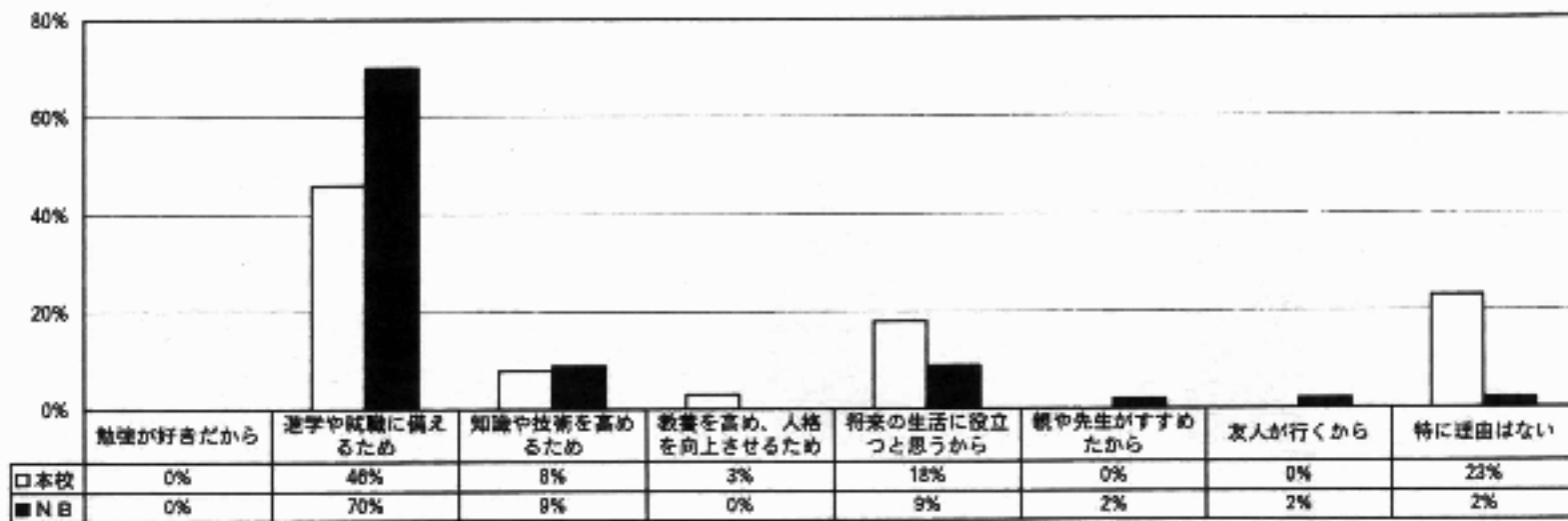
## ② 両校の生徒の学校生活及び規則に関する捉え方

上記のことを調査するため、本レポートの最後に資料として添付したようなアンケートを実施した。回答してくれたのは本校1年生39名とNBの2、3年生53名である。データ数が少ない中での分析であることをお断りしておきたい。

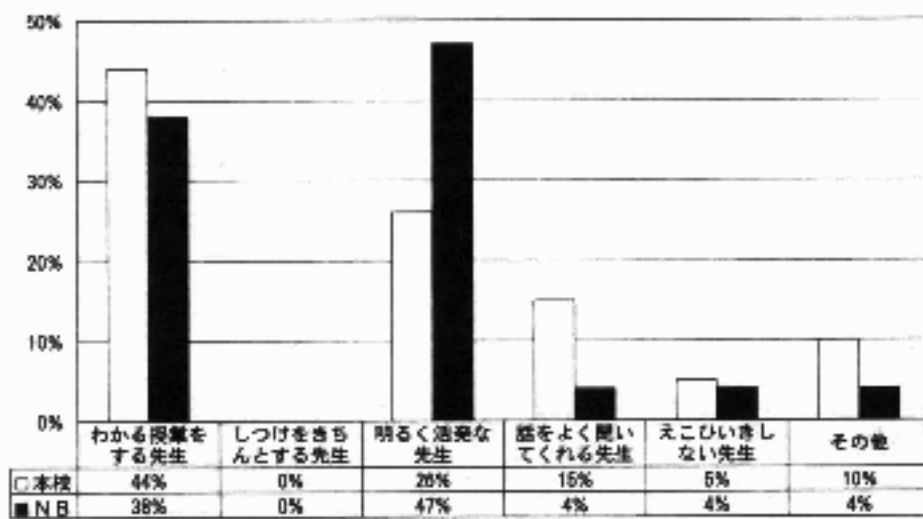
Q1について、選択肢のアからオのいずれかに○をつけた生徒は目的意識を持って高校に入学してきたと仮定すると、NBの方が本校よりも目的意識が高いということが出来る。ちなみに、「勉強が好きだから」を選んだ生徒は両校ともいなかった。

Q2について、本校の場合生徒のほとんどが進学を考えており、そのためわかる授業をしてくれる先生を

### Q1 高校に進学した一番の理由は何ですか？



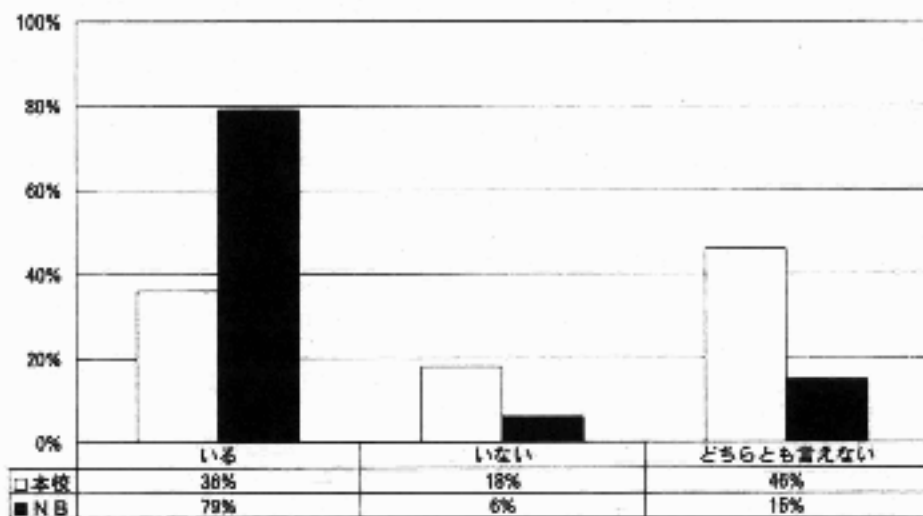
### Q2 どのような先生が好きですか？



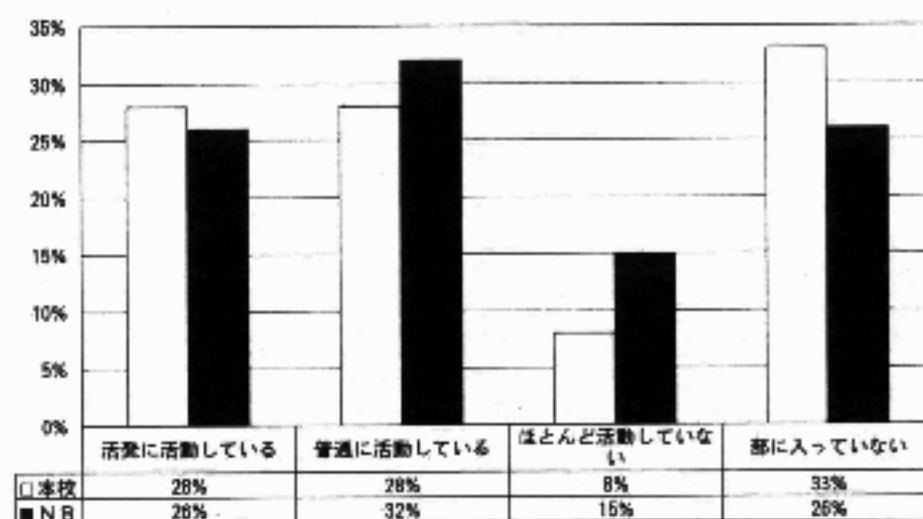
より求めているとも言える。生徒にとっては、授業が楽しくわかりやすい先生、生徒の質問に的確に答えてくれる先生、また困ったことがあった場合には、気軽に相談ののって来て自分の言い分を聞いてくれる先生が理想なのであろう。

Q3について、NBの生徒は「いる」が本校の生徒の2倍以上で79%、「いない」はわずか6%であった。NBでいろいろな授業を見学させていただいたが、教師と生徒のやり取りが多く、教師が一方向的に授業を進めるような授業はなかった。また、アメリカでは日本の教師がやるべき仕事（教科指導、生徒指導、進路指導、HR指導）が分業化されており、教科指導に専念できるということ、また、授業の進度も自分で決められることで、NBに有利に働いたのだと思うが、今の本校の現状の中でいかに生徒の信頼を集めることができるかを今後考えていきたい。

### Q3 信頼できる先生がいますか？



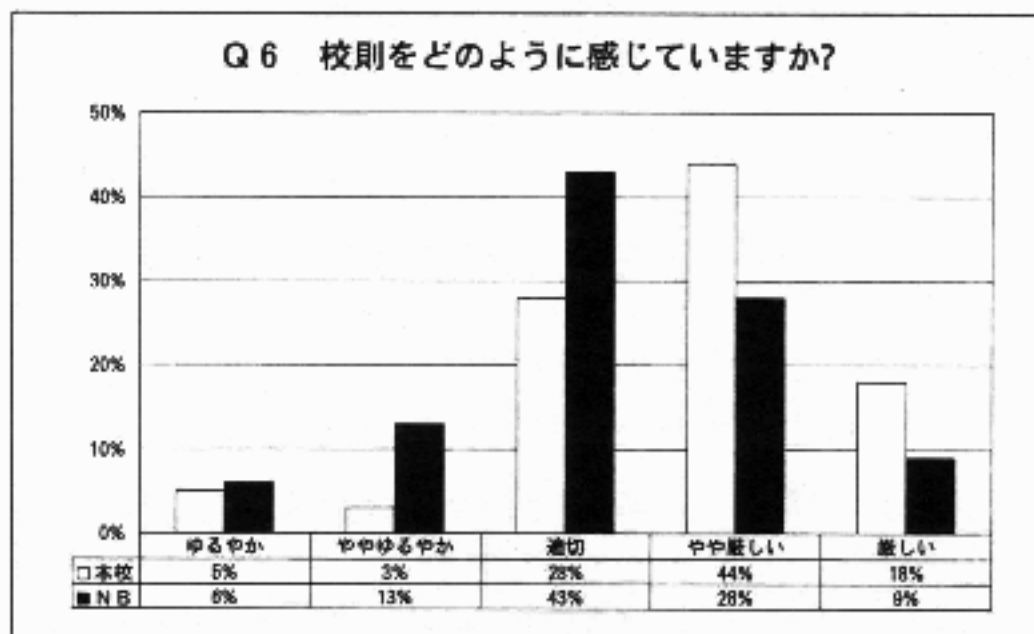
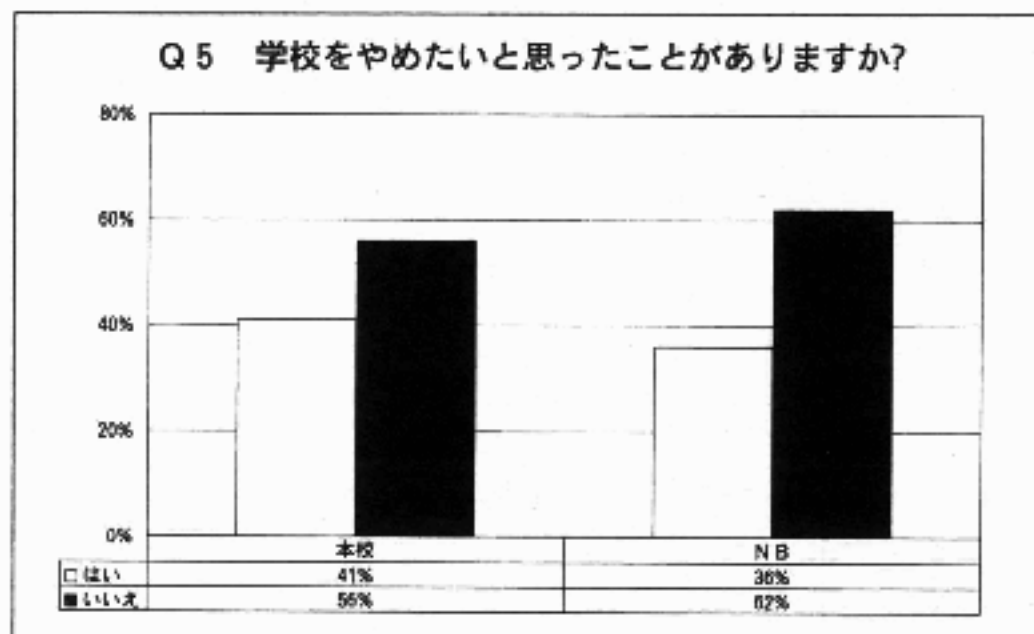
### Q4 部活動をしていますか？



Q4については、NBが「ほとんど活動していない」という割合が高いものの、クラブ加入率において本校を上まわっていたことは意外であった。

Q5について、学校をやめたいと思ったことがあると答えた本校生徒は予想以上に多かった。一方、NBの方はやめたいと思ったことがないと答えた生徒は62%であり、この問いについてもNBの方が学校と生徒の結びつきがより強固といえる。

Q6については、NBの生徒の方が校則



に対する納得の度合いが高いと言える結果となった。本校の生徒のうち、「厳しい」、「やや厳しい」と答えた生徒は、校則について納得できない項目を3つ以上挙げている者もいたし、ややゆるやか、ゆるやかと答えた生徒は、先生も黙認している校則もあって、それらはなくした方がいいという答えもあった。

本校の生徒が、校則の中で納得している項目の内、上位3つをあげてみると、法律上の禁止項目、登校時刻、服装規定であった。登校時刻、服装規定を納得しているのは、他学年に比べ遅刻も少なく服装や髪もきちんとしている一年生だからかもしれない。どうして納得できるのかという問に対しては、「常識だから」、「時間を守ることは大切だから」といった理由をあげていた。校則として納得できないものとしては、アルバイトの禁止、携帯電話・PHSの校内持ち込み、髪の脱色・染色・パーマ禁止であった。携帯電話・PHSは中高生の間でも普及しており、校内持ち込み禁止に不満と唱える生徒は多いと予想していたが、アルバイトを禁止していることに対してこれほど不満を持っていたのかと考えさせられた。不満を抱く理由としては、

なぜいけないのかわからない(いいではないか)といったものが根底にあり、アルバイトは社会勉強になるとか、携帯電話はマナーを守って使えばよいではないかとか、外見は個人の自由だと思うといった考えがあるようである。また、校外の生活は個人の自由であって高校が校則として定めるべきではないといった意見もあった。

NBの生徒が、校則の中で納得している項目の上位3つは、「服装規定」、「時間を守る」、「人を敬う」であった。その理由としては、「ルールだから」、「正しいことだから」といった理由よりも「面倒なことに巻き込まれたくない」というのが3倍近く多かった。一方、不満の上位を占めたのは、「校内で昼食をとらなければならない」、「授業中飲食をしてはならない」、「すべての授業に出席をしなければならない」、「携帯電話やウォークマンを持ってきてはいけない」であった。その理由の一番は、「禁止している理由がわからないから」であり、これは日本の学校にも共通することであるが、な

ぜ規則があるのかについてきちんと説明でき生徒に納得させることができる力が、今後教師にもっと求められていくのではないかと思う。

#### (4) 研究のまとめ

今回のアンケートから、両校の生徒の学校に対する意識は似通っているが、校則や学校に対する不満は本校の方がやや多く、学校への満足度はNBの方がやや高いといえる。両校とも、禁止していることの意義が理解できないか納得できないことに対して生徒は不満を感じているようである。NBでは生徒ハンドブックの中で、校則の意義について述べてある。つまり、禁止している理由付けが本校の場合よりも明確になっている。そういった面でのアカウントビリティ(説明責任)を本校でも果していきたいと思う次第である。また、NBでは生徒がやるべきこと(やってはいけないこと)、教師の役割、保護者の役割についてのマニュアルがありそれぞれに配布されている。そのことによって責任の所在を明確にしているし、やらなければならないことをやらなかった場合には、自己責任を取ると

いう基本認識があった。今後の教育を考える時、この認識は日本においても必要ではないかと考えている。

生徒指導態勢の点から考察すると、両校とも同じような問題を抱えている。NBでは教科担当者からチル・アウト（前述した反省室）に行くように指示された生徒が、行かずに校内をうろうろしたりしている問題や、教科担当者がチル・アウト任せにして、自分が教室でできる指導をやらないといった問題、また問題行動を起こした生徒は副校長が指導するが、4人いる副校長の中の誰が指導するかによって、同じ問題事象でも指導内容が多少異なるといった問題を抱えている。本校の場合は指導内容が異なるといったことは起きていないが、教科担任やHR担任が解決しなければならない問題を生徒指導部任せにしている面はあると思う。

最後に、NBの生徒が校則を守る一番の理由は、「面倒なことに巻き込まれたくない」からであった。これ

の意味するところは、「親に連絡されたくない」、「放課後居残りになったり、土曜日に学校に来たりしたくない」ということであろう。

生徒に校則について理解を得させる面も必要であるが、学校の教育目標に照らして「罰」を与えても絶対に守らせるといった二つの面も、同時に必要だと考えられる。

#### (5) おわりに

今回、ニューバーン・ハイスクールに訪問させてもらって、貴重な体験をさせていただいた。生徒指導に対するアメリカの「厳しさ」と日本の「甘さ」を感じることができたことをありがたく思い感謝している。この研修で学んだことを今後の教師生活に生かして生きたい。

(資料)

学校での生活についてのアンケート (Questionnaire about Your School Life)

- Q 1 あなたが高校に進学した一番の理由は何ですか? 1つだけ選んでください。  
(What made you decide to go on to high school? Please choose one of the followings.)
- ア 勉強が好きだから (Because I like studying)
  - イ 進学や就職に備えるため (To prepare myself for college or future work)
  - ウ 知識や技術を高めるため (To increase my knowledge and creativity)
  - エ 教養を高め、人格を向上させるため (To acquire culture and develop my character)
  - オ 将来の生活に役立つと思うから (Because I thought high school life would be useful for my future life)
  - カ 親や先生がすすめたから (Because my parent (s) and/or my junior high teacher advised)
  - キ 友人が行くから (My friends would also go to high school)
  - ク 特に理由はない (No special reason)
- Q 2 あなたはどのような先生が最も好きですか? 1つだけ選んでください。  
(What kind of teacher do you like best? Please choose one.)
- ア わかる授業をする先生 (A teacher who can explain the lesson clearly and precisely)
  - イ しつこくきちんとする先生 (A teacher who advises students about manners)
  - ウ 明るく活発な先生 (A cheerful and active teacher)
  - エ 話をよく聞いてくれる先生 (A teacher who listens to students' problems)
  - オ えこひいきしない先生 (A teacher who doesn't show partiality to a particular student)
  - カ その他 (Other)
- Q 3 あなたは信頼できる先生がいますか?  
(Do you have a teacher you can rely on?)
- ア いる (Yes)
  - イ いない (No)
  - ウ どちらとも言えない (I can't say which)
- Q 4 あなたは部活動をしていますか?  
(Do you take part in a club activity?)
- ア 活発に活動している (Yes, very frequently)
  - イ 普通に活動している (Yes, I do)
  - ウ ほとんど活動していない (Yes, but I'm not a everyday-participant)
  - エ 部に入っていない (No)
- Q 5 あなたは学校をやめたいと思ったことがありますか?  
(Have you ever thought that you would like to give up school?)
- ア はい (Yes)
  - イ いいえ (No)
- Q 6 あなたは校則をどう感じていますか?  
(What do you think of your school regulations?)
- ア ゆるやか (Lenient)
  - イ ややゆるやか (A little lenient)
  - ウ 適切 (Appropriate)
  - エ やや厳しい (A little strict)
  - オ 厳しい (Strict)

本校の生徒心得について、次のQ 7～Q10に答えてください  
(As to the following questions, please write freely)

- Q 7 規則として納得できるものを3つあげてください  
(Please pick up 3 school regulations which you students always observe.)
- Q 8 どうして納得できるのか、規則ごとに書いてください  
(Why do you always observe the above regulations?)
- Q 9 規則として納得できないことがあれば、3つ以内で答えてください  
(Please pick up 3 things of the school regulations which you students don't wish to observe.)
- Q 10 Q 9で挙げたものの理由を書いてください  
(Please write the reasons.)

☆アメリカの高校生活はどのようなものだと考えますか。次の項目について書いてください。  
(Please imagine high school students in Japan. What do you think of the followings?)

勉強 (Study) :

服装・頭髪 (Clothing and Hairstyle) :

校則 (Other School Regulations) :

クラブ活動 (Club Activities) :

特別活動 (School Events) :

Thank you!

## 三郷北小学校とウォールコート小学校の交流の実際と課題

### ーウォールコート小学校の訪問を通してー

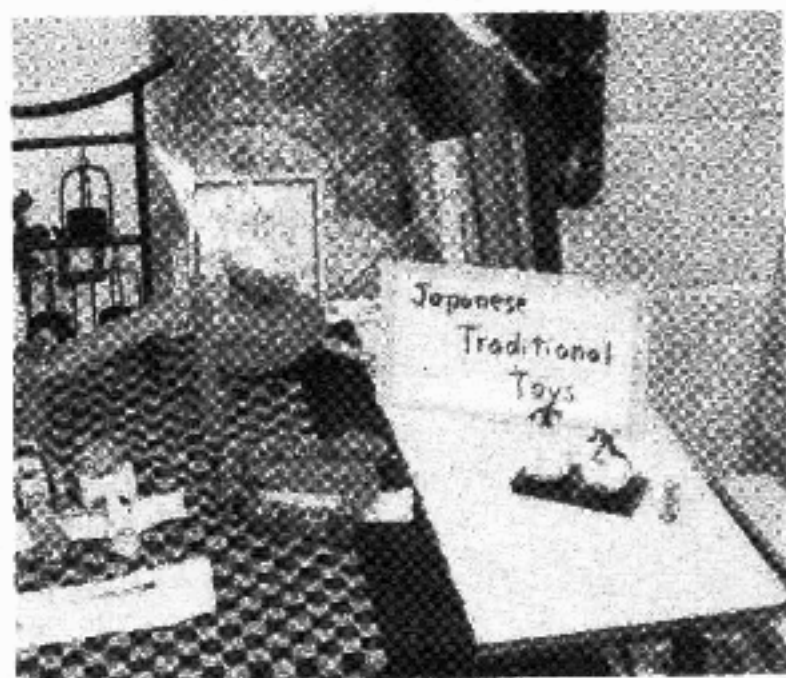
奈良県三郷町立三郷北小学校 教諭 小 阪 昇

#### (1) はじめに

三郷北小学校と米国ノースキャロライナ州ウォールコート小学校は、平成12年に姉妹校提携を結んで交流している。教員がお互いの学校を訪問することで、日本とアメリカの教育を学んでいる。また、それぞれの学校の子供達は両国の文化について、授業や学校行事などを通じて学んでいる。ここでは、交流の実際とこれからの課題について考えていきたいと思う。

#### (2) ウォールコート小学校において

ウォールコート小学校では、日本についての関心が非常に高いようである。特に日本についての関心が高い先生の教室には、左の写真のように日本に関する本



【教室での展示の様子】

や道具・おもちゃが展示されていて、子ども達が自由に見ることができるようになっている。また、玄関のスペースや校長室にも日本のものが展示されていた。

また、参観した4年生の授業では「俳句」について勉強していた。

全校で取り組んでいたものとしては、私達の訪問に対する歓迎集会でウォールコート小学校の全校児童で日本の盆踊りを披露してくれた。

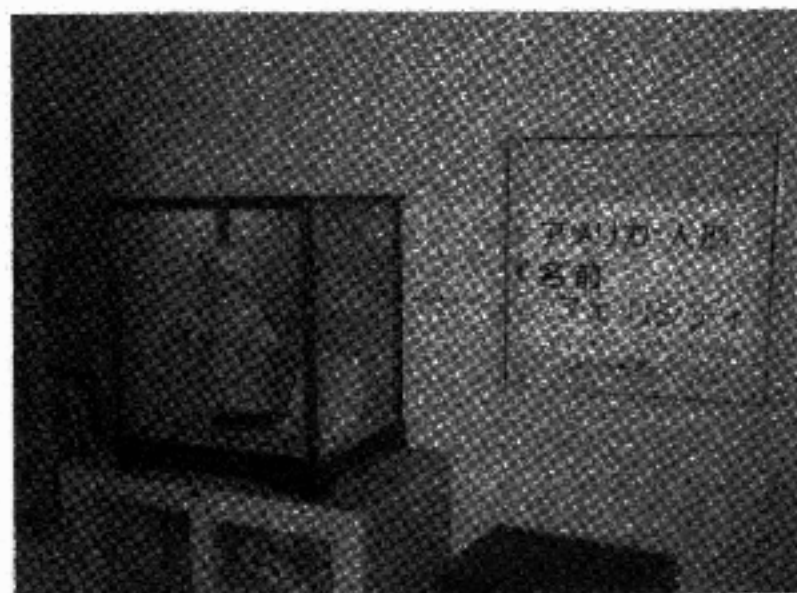
また、ウォールコート小学校の学校行事として、Japanese Festivalというものがあり、ここでは、日本の伝統的な遊びであるこま回しやけんだまなどを、全校児童で体験している。子ども達も大変喜んでいて、大盛況であったとのことである。

このように、ウォールコート小学校では、先生達が企画して日本文化の紹介等を行っている。日本への関心の高さがうかがえた。

#### (3) 三郷北小学校において

三郷北小学校は、ウォールコート小学校からの先生達の訪問が3年目を迎えたこともあり、児童の目に付きやすいところにアメリカやノースキャロライナの展示がされている。そして、子ども達にとってもウォールコート小学校は身近な存在であるように思う。学級によっては、簡単な英会話を学習しているところもある。

ただ、教室の掲示に際してはウォールコート小学校



【廊下の展示】

のように盛大ではなくどちらかというと地味なものである。

また、ウォールコート小学校の子ども達の作品が掲示されていた時期もあった。

#### (4) 今後の課題

お互いの訪問時の先生達の交流はとても活発である。また、先生達と子ども達との交流も行われている。今後は、両校の子ども達同士の交流をどうしていくかが

課題であると思う。具体的には、継続的な「作品交流」、「メール交換」、「意識調査」等が考えられる。問題になるのは、言葉や時差であると思う。日本では総合的な学習の時間が導入され、現在試行中であるが、その時間に「国際理解教育」を取り入れて取り組むことも考えられる。いろんな難しい問題があるが、姉妹校提携をした両校がさらに友好を深められるような方法を模索していきたい。



# 特別な教育支援を必要とする児童への対応について

## －米国ウォールコート小学校の実践から－

奈良県三郷町立三郷北小学校 教諭 小 阪 昇

### (1) はじめに

私が勤務する三郷北小学校は、平成12年に、米国ノースキャロライナ州のウォールコート小学校と姉妹校提携を結んでおり、相互に教員が訪問している。このプロジェクトを通して、三郷北小学校ではウォールコート小学校の教育実践を学んできた。アメリカの学校の先入観として持っていた“アメリカの学校は自由だ”“自由な発想を重視して個性を尊重している”“テストの点数よりも考える過程が大切”等の考えは改めなければならなかった。

実際のアメリカの教育は、基礎学力を重視し、国をあげて学力向上のキャンペーンをしているほどである。州の統一テストがあり（The end of school test）その結果により学校の評価が決まるなど、とても学力向上に力を注いでいるようだ。

そのようなアメリカの小学校の現状の中で、障害児・LD児・学力が遅れている児童等、特別な教育支援を必要としている児童に対してどのような対応をしているのかに興味を持った。平成12年度に私は障害児学級を担任していたこともあり、本校の障害児教育との比較も行ってみたいと考えた。障害児学級の担任は3つの役割を持っていると考える。1つは障害児の能力・学力の向上である。2つ目は障害児が他の子ども達と交流することによって社会性を発達させることである。3つ目は障害を持っていない子ども達が障害や障害児

(者)について理解を深めることである。このような点についても日米の比較を通して、ウォールコート小学校から学びたいと考える。

### (2) 研究の概要

#### ① ウォールコート小学校での障害児教育

ウォールコート小学校では、3つの障害児学級があり、障害の程度にあわせてそれぞれのクラスに分けられている。どの小学校にも障害児学級はあるわけではなく、障害児学級がある小学校に障害をもっている子は通ってくるということである。

クラスでの指導の様子や普通クラスとの交流について、授業の参観や、担当の先生へのインタビューを通して考察していきたい。

#### ② LD児・学力が遅れている児童への指導

ウォールコート小学校は、ノースキャロライナ州のピット郡の中で、The end of school testの成績がとても優秀で、先生達はそのことをとても誇りにしておられるようであった。それは、個々の能力に応じた指導がうまく機能していることだと考えられる。そこで、学力的に特別な支援が必要な児童への配慮について調べてみたい。

また、日本の小学校では難しい問題とされている能力別授業（習熟度別授業）についての効果や問題点を探していきたい。

### ③ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関
3/26 (月)	ECU Martin Middle School New Bern High School Wahl Coates Elementary School	副学部長との面談 授業参観・質疑 Wahl Coatesではteacher work day の為先生達との歓談	Wahl Coates School 2200 E. Fifth Street Greenville NC27858 252-752-2514

3/27 (火)	Wahl Coates Elementary School	歓迎集会 オリエンテーション 5年生・3年生の授業参観 日本語教室(先生達の)に参加	Sandra W. Harvey Barns Barbara Shreve La Veta Weatherington
3/28 (水)	Wahl Coates Elementary School ECU	コンピューターを使った授業の参観 障害児学級参観 ECUでの体育の授業参観(障害児学級)	Crew Adams
3/29 (木)	Wahl Coates Elementary School	4年生授業参観(Art) カウンセラーについて 4年生授業参観(Guidance Class) 4年生授業参観(俳句)	La Veta Weatherington Judy Frye  Watson
3/30 (金)	Wahl Coates Elementary School	2年生授業参観(Math, Reading) 障害児学級参観	Holland Dill Smith Adams Macarthur
4/2 (月)	Brownstone Hotel	Summary Conference	
4/3 (火)	Exploris Museum Exploris Middle School  NC Science Museum DPI	Exploris Middle Schoolを訪問 授業参観 Exploris Museumを見学 NC Science Museumを見学 DPIで資料購入	

### (3) 研究の結果と考察

#### ① ウォールコート小学校での障害児教育

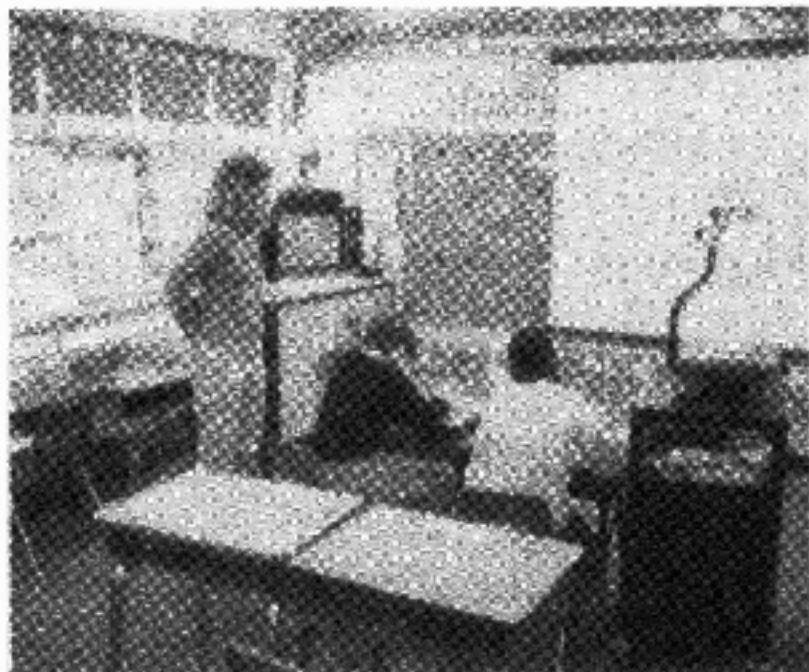
ウォールコートの障害児学級は3クラスある。Minor先生は、機能障害の子ども達5名を担当されている。



【Adams先生の算数の授業】

Adams先生はIQ60までの子ども達12名を担当されている。Macarthur先生はIQ75までの子ども達8名(LD児を含む)を担当されている。ここでは主にAdams先生のクラスについて考察していきたい。

Adams先生のクラスには、12名の子ども達が在籍している。先生は3名である。Adams先生とアシスタントティーチャー、それにECUの教育実習生である。授業の内容によって一人の先生が一斉指導を行って他の2人の先生が個々の子ども達の支援にまわったり、学級を3つに分けてそれぞれ違う内容を学習したりと授業の形態は内容によって変えているということであった。ECUの学生がこの学級では“先生”として位置付けられており、指導にあたっていることは、日本とは大きな違いである。ウォールコート小学校はECUとのつながりがとても強く、それが教育の実践の場でもプラスに働いているようである。



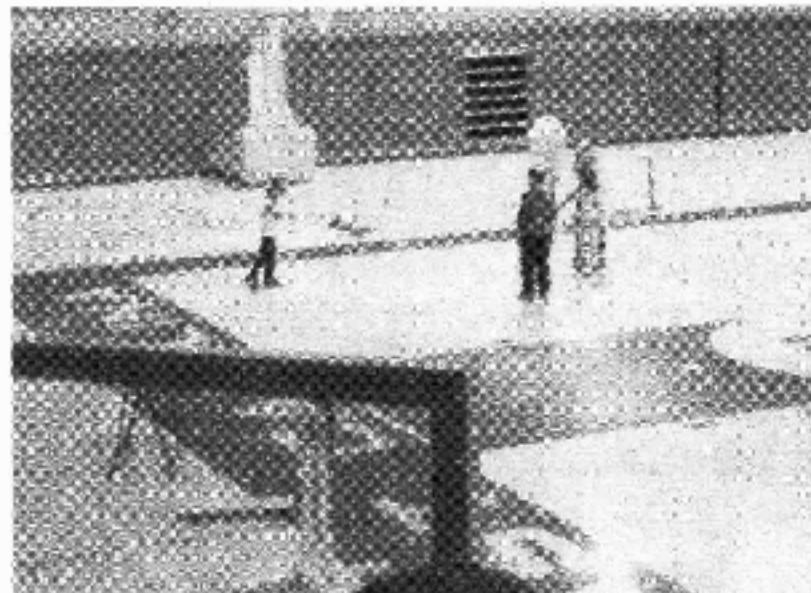
【ECUの教育実習生による授業】

ウォールコート小学校の障害児学級に在籍している子ども達は、1週間に一度ECUへ行き体育の授業を受けている。その時は、ECUの体育専攻の学生や障害児教育専攻の学生が指導している。しかも子ども一人に対して学生一人が担当し、ずっと同じ学生がその子を担当するというシステムになっている。そうすることによって、学生がその子とより深い人間関係を作ることができ、また、能力に応じた効果的な指導ができるとのことである。子ども達の様子を見ていると、自分の担当の学生を見つけるととてもうれしそうに抱きつきに行ったり笑顔で挨拶をしたりと、この授業をととても楽しみにしているのがわかった。このシステムは学生にとってもとてもプラスになることだと思う。

また、コンピューターは教室に3台設置されており、学習レベルに合わせていつでも使えるようにセットされている。これは、障害児学級に限らずどの教室でもそのようにされていて、驚かされた。

この学級にいる子ども達は障害の程度によって普通学級で勉強することもあるという。ただし、学校生活の中心はこのクラスで過ごすことが多いとのことである。

このように、ウォールコート小学校では、障害を持っている一人一人に応じた指導がなされていると思う。すなわち、その子の持っている能力を伸ばす為の指導が徹底されているように思う。Adams先生は、ウォールコート小学校で21年間障害児教育(special education)に携わっておられるとのことである。日本の公立の小学校では、転勤があり、また校内での配置転換は毎年行われている。システムの違いがあるが、ウォールコート小学校ではそれだけ専門性が高まり、教材開発も進



【ECUの学生による体育】

んでいるように思えた。

障害を持っている児童と普通学級との交流であるが、20年程前は分けて教育する方法が多かったそうだが、現在はその子の障害の程度によって普通学級に通級する子もいるとのことである。障害児学級の児童にとっても普通学級の児童にとっても、お互いを知り合うことはとても大切なことだとAdams先生はおっしゃっていた。これは日本の小学校でも共通した考え方だと思う。ただ、ウォールコート小学校の場合、普通学級でやっていけない場合は分けて教育するとのことでした。実際あまり活発に交流している光景は見かけなかった。

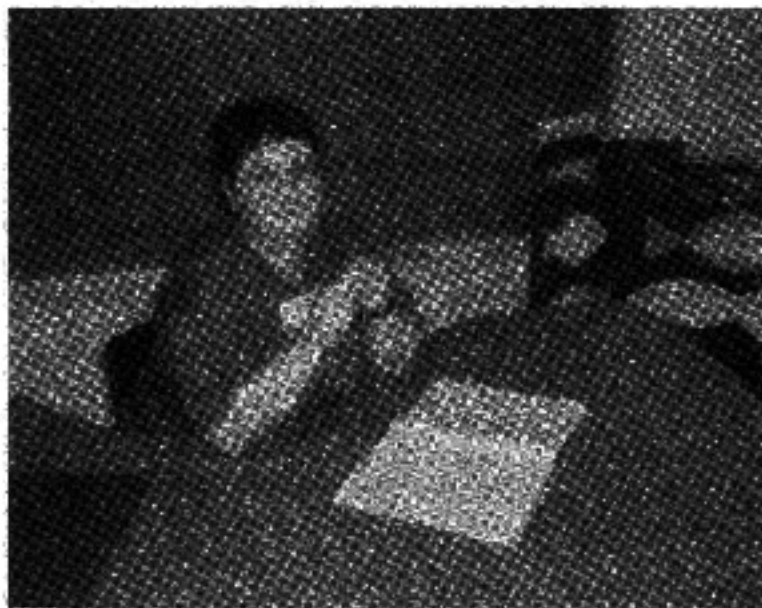
日本の小学校の場合、学校生活の中心は原学級にあり学習の時間だけ障害児学級で勉強するということが多い。これは、障害を持っている児童の社会性や協調性を伸ばしたり、また、普通学級の児童が障害について一緒に活動する中で学んだり、同じく協調性を伸ばしたりするためである。社会性・協調性・奉仕の精神等、日本では学校教育でつける力と考え、学校行事や日々の活動を通してこれらの力が養えるように企画していく。しかし、アメリカでは社会性・協調性・奉仕の精神等は学校よりも家庭でつける力と位置付けているようである。また、教会もそのような役割を担っているとも聞いた。アメリカにおいて学校とは学力をつける場所という意味合いがとても強いように思える。そして、学力をつけるために、少人数のクラスであったりコンピューターの積極的な学習での利用等、より良い環境を整えている。障害児教育においても同じことであるといえる。その児童の持っている能力をいかにして引き出し伸ばすか、自立のための学力をつけるかに重点がおかれているようである。日本の小学校に

おける障害児教育との違いはこのようなところにあるように感じた。

## ② LD児・学力が遅れている児童への指導

Macarthur先生のクラスでは8名の児童が学習している。このクラスは、テストで低い点を取った児童やLD児が基礎的なこと（reading, math）を学習するためのクラスである。いわゆる補習をするクラスである。普段は普通学級に在籍して学習しているが、reading mathが苦手な特別な支援が必要という児童が通ってくる。そして、力が付いてくれば元の学級にもどる。児童は週のうち決った時間にここの学級に来るとのことである。Macarthur先生は、「基本的には元の学級で学習させるが、必要ならこの学級で学習させて、力が付いてくれば元の学級に戻る。それがゴールである。」とおっしゃられていた。

特別な支援が必要な児童に直接 Macarthur先生が「このクラスで勉強しないか？」と声をかけるということである。日本の小学校では放課後や休み時間に遅れ



【Macarthur先生】



【ボランティアによるreadingの補習】

ている児童への補習をすることはあるが、授業時間に別の教室ですることは滅多にないことである。ここではそれが当たり前のように行われていることに驚いた。Macarthur先生によると、児童がこの学級に来ることに抵抗はないとのことである。このシステムはウォールコート小学校では20年程前から行われており、他の学校のモデル的なものとなっているとのことである。他の学校から先生が見学に来られたりこのシステムを取り入れられたりしているとも聞いた。

またこの学校では約50名のボランティアがいて、readingのサポートをしているとのことである。実際いろんな教室を参観していて、授業中廊下でボランティアの人と児童が1対1でreadingの練習をしているのをよく見かけた。ボランティアは、親、学生、退職した教員などさまざまということであった。日本でも地域の人々が学校へ来て体験学習的なことは盛んになってきているが、遅れている児童への補習という形で地域の人々が学校へ来るというのではない。

このようにウォールコート小学校では、学力が遅れている児童に対して、Macarthur先生のクラスでの学習やボランティアによる補習などきめ細かに対応している。すなわち、その子の能力に応じた学習ができるようになっている。日本人の感覚として、別のクラスに行ったり授業中一人廊下で勉強するのは他の子ども達の目がありとても抵抗があるのではと思う。しかし、ここではそのようなことも当たり前のよう考えられている。子ども達の様子を見ても特に抵抗など感じていないようである。

## (4) 今後の展望

ウォールコート小学校で特別な支援を必要としている児童への対応を中心に見てきたが、これには国やノースカロライナ州の教育政策が大きく影響していると感じた。アメリカは1980年代に子ども達の学力低下を国家的な危機とみなし学力を向上させるキャンペーンを行った。ノースカロライナ州では、ABCs(accountability, basic, local control)と名づけられた教育改革が行われた。このようなもて各学校は、いかにして児童の学力を向上させるかに力を注いだと思われる。学校は子ども達が学習するところであり、その学校が“結果”を出すということはすなわち子ども達の学力を向上させることである。具体的には、州の統一試験(the end

of school test) で目標を上回ることである。

学力を向上させるには、個々の能力に応じた指導がとて大切なことである。ウォールコート小学校では優秀な児童は別のクラスで学習したり、また、支援が必要な児童にはボランティアがついたり別のクラスで学習したりと、とて合理的で効率のよいシステムがとられていると思う。日本の公立小学校は“平等”ということをとて大切にする。能力別に授業をすることは、日本の公立小学校では稀なことである。また、授業中に一人別の場所で補習的な学習をすることもない。この点はウォールコート小学校との大きな違いであると思う。

このように個々の能力に応じた指導が徹底されているウォールコート小学校のシステムをそのまま日本の公立小学校に取り入れることは難しいが、学ぶべき点は大いにあると思う。障害児教育に関しては、ウォールコート小学校ではECUの学生と児童が1対1で体育の授業を行っている。これは、その児童の体育的な機能を伸ばすだけでなく社会性や情緒的な面からも大いにプラスになっていると思う。本校でも検討していきたいと考える。また、学習が遅れている児童への指導であるが、本校ではTTや分割授業(少人数)で対応しているが、教員の数の問題もあり充分とはいえない。

個々の能力に応じた指導をしていく上で能力に応じた指導は不可欠であるので、その運用の仕方など模索していきたい。

#### (5) おわりに

日本とアメリカ両国は歴史的にも文化的にも大きな違いを持っている。それはお互いの教育のシステムや考え方にも大きく影響を及ぼしていると思う。今回の訪問で、その違いを実感した。しかし、授業中一生懸命学習している子ども達が、ランチルームで無邪気に私たちに話し掛けてくる様子や笑顔を見ていると、日本の子ども達と何ら変わることはなかった。また、授業やアメリカの教育について熱心に説明して下さったウォールコート小学校の先生達からは、教育についての熱意がひしひしと感じられ、これも日本の先生達と同じものを感じた。

Summary Conferenceで、日本とアメリカの教育の違いについての話の中で“両国はそれぞれの文化の中でうまく生きていけるような教育を行っている”という意見があった。そして、“それぞれがお互い学びあうのが今後の課題である”という意見もあった。このプロジェクトを通してお互いがよりよい教育を構築できるようになればと思う。

2002年9月21日 印刷

2002年9月30日 発行

## **未来への架け橋 2001**

—グローバル・パートナーシップ・スクール—

## **Bridging to the Future 2001**

—Global Partnership Schools—

編集兼 大阪教育大学

発行者 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

電話 (0729) 78-3299, 3300, 3831

印刷所 カツヤマ印刷

〒543-0044 大阪市天王寺区国分町5-1

電話 (06) 6771-1000